

# 末松謙澄の師 村上佛心を巡る人々 完

## 日田の豪商・広瀬本家とその事業

日田の私塾咸宜園の塾主広瀬淡窓は、漢詩人・教育者として全国的にその名が知られていた。しかし嗣子がなく、弟の旭荘が二十五歳離れた兄・淡窓の養子となり、咸宜園を引き継ぎ第二代の塾主になった。旭荘の詩才は、師である亀井昭陽に賞讃され、それを慕って咸宜園を訪れる者も多かったという。

この旭荘と村上仏山は、生涯の友であった。仏山の師・原古処の娘の采蘋が文政八年（一八二五）の正月に福岡の亀井塾で二人を引き合わせた。この采蘋も仏山が慕った数少ない師の一人であった。当時、旭荘は亀井塾の塾長で二人は意気投合したので、宮崎宮の玉せせりを一緒に見に行き親しくなった。のちに仏山が詩集を刊行した時、旭荘は快く序文と評文を、淡窓は眼の病をおして題言を寄せた。

広瀬本家は、日田代官所の御用達であり、掛屋かけやを兼ねた。掛屋は代官所に入る年貢米を取り扱い、その代金を保管する。そのため財政難にあえぐ九州諸藩は日田商人から

金を借りた。これを大名貸しとい

い、天領の公金であるため貸し倒れが無く、日田の掛屋は莫大な富を蓄積した。広瀬本家の掛屋・博多屋をはじめ七、八軒の掛屋が動かす「日田金」は二〇〇万両に上るといわれ、常にその半分は九州の諸大名への大名貸しにまわっていた。主な藩は、小倉藩二〇万七〇〇〇両、久留米藩九万六〇〇〇両、福岡藩一〇万二〇〇〇両、このほか三、四万両を借りていた大名は多数あった。

### 《広瀬本家の主な事業》

■豊後国日田郡小ヶ瀬井路、豊前国宇佐郡広瀬井路の開削

■三隈川と中城川を浚渫して筑後川へ舟運を開く

■豊前海岸の干拓にあたり、千数百町歩に及ぶ新田開発など

これらの功により、一代帯刀を許された。さらに対馬藩田代領の借財整理、豊後府内藩の財政改革をまかされた。なお、広瀬勝貞元大分県知事（平成一五年四月～令和五年四月、五期二〇年）は、広瀬本家の子孫にあたる。